

絵入版本『曾我物語』について

——寛永頃無刊記整版と寛文三年刊本の挿絵の検討——

小井土 守 敏

はじめに

建久四年五月二八日、曾我十郎祐成・五郎時致兄弟が、富士裾野で宿願の敵工藤祐経を討った。この事件は、『吾妻鏡』に記録として記される他、『曾我物語』として物語化された。

この物語は、まず真名本十巻として成立し、仮名本十巻になり、記事の増幅、種々の挿話・後日譚を加え、流布本十二巻に到る⁽¹⁾。この物語——殊に仮名本系本文——は、いわゆる「曾我物」の諸文芸の根元として後代への影響は大きい。また同時に、物語自体も、近世以降、多種の版本、いわゆる流布本として出版された。

近世——特に寛永・正保・慶安・承応年間——には、印刷技術の発達とともに、絵入版本が数多く出版されるようになった。いわゆる軍記物に限っても、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『義経記』などにも絵入版本が見られる。流布本『曾我物語』の版本の諸本には、慶長一〇年（一六〇五）頃刊とされる十行古活字版から、寛延三年（一七五〇）刊本に到るまで、古活字版一一種、整版九種があり、その中、最初に挿絵を入れた十二

行一枚絵入古活字版から、現在最終の版とされる寛延三年刊本まで、一一種の絵入版本が伝在する⁽²⁾。

本稿では、多くの丹緑絵を有する寛永頃無刊記整版と、絵入版本『曾我物語』諸本の変遷の中で大きな変化を遂げ、後の版に影響を及ぼしたとされる寛文三年刊本との二本を取りあげ、それぞれの挿絵について比較・検討し、その変容を跡付け、併せて挿絵による物語の改作という問題について考察する。

一

絵入版本『曾我物語』の諸版の中で稿者の管見に入った各版は、以下の通りである⁽³⁾。「」内に絵の数を記す。

I 十二行組合せ絵入古活字版 [二〇一図]

国文学研究資料館蔵本（赤木文庫旧蔵本）

一 二冊（落丁あり） 元和寛永頃の刊行

II 寛永頃無刊記整版 [一九三図]

筑波大学附属図書館蔵本 一 二冊（完本）

寛永頃から正保三（一六四六）年以前の刊行

正保三年（一六四六）刊有挿絵版 [一九一図]

国会図書館蔵本 合六冊 (完本)

III 寛文三年(一六六三) 刊本

〔一二五図〕

国文学研究資料館蔵本 一二冊 (完本)

寛文十一年(一六七二) 刊本

〔一一九図〕

学習院大学国語国文学研究室蔵本

一二冊 (完本)

貞享四年(一六八七) 松会版

〔九〇図〕

昭和学院短期大学図書館蔵本

一二冊 (完本)

貞享四年(一六八七) 須原平助版

〔九〇図〕

宇部市立図書館蔵本 (新井文庫本)

一二冊 (完本)

元禄十四年(一七〇一) 刊本

〔七四図〕

蓬左文庫蔵本 合四冊 (完本)

IV 寛延三年(一七五〇) 刊本

〔一五三図〕

中京大学蔵本 一二冊 (完本)

Iは、『曾我物語』の絵入版本としては初期のもので、挿絵は、墨刷単色、組合せ絵である。ほぼ全段にわたり挿絵が入り、そのほとんどが章段と章段の間に配され、章段の本文が終わった後は、空白行となり、丁が改まる。そのため、挿絵と本文との関係は極めて密接である。描線は、寛永風。挿絵の絵師は不明である。本文と絵は別の丁に刷られる。同一丁に本文と絵を入れることはない。従って見開き一面の挿絵はない。

IIは、彩色絵を有する丹緑本である。正保三年版は、寛永頃無刊記整版の覆刻である。村上学氏は、

(正保三年版) 絵は天地の寸法を合せるために画き足す。

寛永無刊記版は本文の版心の左右に界線を有せず、絵の版心は非常に広いが、正保三年版は左右で界線があり、版心

も普通の幅(約一種)に統一されている。

とされている。ほぼ全章段にわたり挿絵が入り、挿絵と本文の関係は密接である。挿絵となる場面・挿絵の構図は、Iの諸本とほぼ重なる。描線は寛永風。挿絵の絵師は不明である。本文と絵は別の丁に刷られる。同一丁に本文と絵を入れることはなく、見開き一面の挿絵はない。

IIIは、墨刷単色の絵を有するもので、丹緑本(手彩色本)に対して廉価版・頒布版である。寛文十一年以降の諸版の絵は、寛文三年版の模倣あるいは覆刻である。村上学氏は、

(寛文十一年版の) 版面は、本文は寛文三年刊本を模し、二行ずつ詰めてある。絵も寛文三年刊本の模倣である。この版は、計七本見たが、版元の名の記されたものはなかった。再刷、後刷が多く、それには「開板」の文字がない。幕末まで刷を重ねたようである。

とされている。また、元禄十四年版の絵は、寛文十一年版の求版後刷である。ここに分類した諸本は、年代が下るとともに、絵数が減少する。また、それに伴って該当本文と絵との間隔が大きくなり、結果的に本文との関連が希薄になる。絵は師宣風、挿絵の絵師は不明である。本文の丁と挿絵の丁という挿絵の入り方とともに、「丁オモチが本文、丁ウラが挿絵」「丁オモチが挿絵、丁ウラが本文」という組合せによって、見開き一面の挿絵がある。

IVは、墨刷単色の絵を有するもので、IIIに分類した諸版の絵を覆刻したものである。しかし、構図や細部に改変が行われている。多くの絵を省略しており、当版において新たに加えられ

た挿絵はない。

二

寛永頃無刊記整版には、前述の通りほぼ全章段にわたり挿絵が入り、絵に描かれる事柄を記す本文と挿絵は位置的に近接し、両者は密接な関係を保っている。本文と近接しているからこそ稚拙な絵であつても挿絵が表す場面が把握できるような場合もある。

寛永頃無刊記整版の挿絵は、二ないし三図で一章段を表現する。資料Aは、巻五「浅間の御狩の事」の章段の挿絵である。頼朝の一行が狩場へ赴く場面を描いたもので、「3オ」で一行の一部を描き、頁を繰ると、「3ウ」で頼朝が描かれるという具合である。このように、一つの章段を複数の絵で表現している絵柄は、本文の流れに従つて話の展開に沿いつつ物語を説明するものとなっている。挿絵を追いながら物語を読み進めていけるのである。但し一章段に複数の挿絵が入るということについては、本文は本文、絵は絵の丁で刷られているため、必然的に丁のオモチとウラとで二図となるといふ、版本作成上の制約を考慮に入れるべきであるが。

これに比較して、寛文三年刊本は、絵数を減じ、話の内容を記す本文と絵とは、位置的に隔たりを生じている。又、複数の絵によつて一つの章段を表現するという例は著しく減少する。この版は、物語のある場面を断片的に挿絵に表現する。挿絵を追いながら物語内容を知ることができない。しかし、「丁オモチが本文・丁ウラが絵」という一枚と、「丁オモチが絵・丁ウラが

本文」という一枚の組合せによつて、——このことはつまり版下作成の段階から「絵入版本」の作成意図があつたことを示すのだが——見開き一面の挿絵が可能となる。資料Bは、資料Aと同じ章段の挿絵であるが、ここに見られるように、大きな構図に、より多くの、本文に書かれた事柄を描くようになるのである。

寛永頃無刊記整版では二つの図に分割して描かれていた頼朝の一行の挿絵を、寛文三年刊本は、空を飛ぶ鳥から勢子が連れる犬まで、見開き一面の挿絵一図で表現するようになったのである。寛永頃無刊記整版と寛文三年刊本の挿絵は、挿絵の入り方によつて、絵数と絵柄に変化を生じたと言える。

巻九「十番ぎりの事」の、兄弟が人々を斬り廻る場面を、寛永頃無刊記整版は、兄弟が闇の中を斬り廻る様子を描いたもの・闇の中で味方同士で斬り合う者たちの様子を描いたもの・松明を持ち出す人々の様子を描いたもの、という三つの挿絵で表現している。本文の記述に沿つて、挿絵は展開してゆくのである。しかるに、この場面を、寛文三年刊本では、見開き一面の一図で描いている。この絵を詳細に見てみると、右側に描かれた斬り廻る兄弟を初めとして、逃げる者、味方打ちする者、投げ出された篝火まで、寛永頃無刊記整版が三つの図を費やした場面を余すところなく表現している。この絵からも、寛文三年刊本は、大きな構図に、より多くの本文に記された記事を描くようになるということが確認できるのである。

しかし、大きな構図に多くの記事を描こうとする寛文三年刊本の姿勢は、ときに本文に記された状況を誇張して描いてしま

うことにもなる。

巻一「おなじく相撲の事」は、伊豆国に流されている源頼朝の徒然を慰めるため、相模・駿河・伊豆の武家たちが奥野で狩りを開催し、その狩り場での余興に人々は相撲に興ずることとなるという記事であるが、寛永頃無刊記整版では、滝口三郎と合沢弥七との相撲の様子を初めとし、人々が相撲に興じる様子を描いた挿絵の後、河津三郎が俣野五郎を打ち負かす様子を描いている。本文の記述に沿ったものである。この場面を、寛文三年刊本は、河津が俣野を打ち負かす様を見開き一面の一図で描いている。相撲を取る二人の周囲にはまわし姿になった男が四人配置され、複数の取り組みが行われたことは示されているが、それを見物する頼朝及び御家人たちは、立派な棧敷のような所に座を占めている。本文の記述に、大庭平太が「これ、芝居の座敷、誰を上下とさだむべき」と発言していることや、そこが「狩り場」であるという状況から、村上字氏が言われるように、この棧敷のようなものも寛文三年刊本の挿絵に現れた誇張というべきであろう。

三

寛文三年刊本において、寛永頃無刊記整版の挿絵で生じていた本文との不整合を差し替え又は訂正しているものがある。

巻一「惟喬・惟仁位あらそひの事」の章段において、寛永頃無刊記整版では相撲の様子が描かれていた挿絵が、寛文三年刊本では競馬の挿絵に差し替えられている。挿絵に相当する本文は、以下の通りである。

すでに競馬は、十番の際にさだめられしに、惟喬の御方に、つづけて四番かちたまひけり。惟仁の御方へ心をよせたまつる人々は、汗をにぎり、心をくだきて、祈念せられける。《中略》所願成就してげりと、御心のべ給ふ所に、「御方こそ、六番つゞけてかちたまひ候へ」と、御つかひはしりきつれば、喜悅の眉をひらき、いそぎ壇をぞをりられける。ありがたし瑞相なり。されば、惟人親王、御位にさだまり、東宮にたゝせたまひけり。

流布本(版本)『曾我物語』の本文には、惟喬と惟仁が競馬で東宮の位を争ったという記述はあるが、相撲の記述は見えないのである。つまり寛文三年刊本は、本文に即して絵を差し替えたのである。なぜこの場面に相撲の挿絵が描かれたのか。真名本『曾我物語』に、以下のような記述がある。

以三朕思慮二選授レ位事用捨似レ有レ私、人臣必返レ脣有レ諂、須以二競馬藝二知其徳運、付二相撲勝負二辨其高德、依二雄士二授三寶祚、任三果報二可レ與帝位、《中略》年来日來奉レ寄レ心月卿雲客、各引二分兩方、把レ手碎レ心、有二十番競馬、四番一宮御方勝、《中略》後六番連亦二宮御方勝、其後相撲无二相違二宮御方勝、

(巻第一)

競馬と共に相撲で帝位を競ったという記事が見られるわけである。なお、「惟喬・惟仁位争い」の逸話は『平家物語』巻八「名虎」に見られ、そこにも競馬による勝負の後、相撲も行われたという記述がある。寛文三年刊『曾我物語』よりも早く版行された明暦二年(一六五六)の刊記を有する絵入『平家物語』の挿絵は、相撲の様子が描かれている。つまり、相撲の件が広く知

られていたわけである。「惟喬・惟仁位争い」の逸話としては、寛永頃無刊記整版も寛文三年刊本も誤りではないのであるが、寛文三年刊本は、より流布本『曾我物語』の本文に忠実な絵に改められたという事になる。

同様のことが、卷三「九月名月にいでて、一万・箱王、父の事なげく事」の章段の挿絵（資料C・D）についても言える。父のいないことを嘆き、父の敵を討つことを改めて決意した幼い兄弟が、障子を敵に見立てて傷をつける場面である。流布本の本文は、

兄がきゝて、うちわらひ、「わ殿、さやうにいふ共、てなれずしては、いかゞ候べき。見よ」とて、竹の小弓に、篋は薄なる笹矧の矢さしつがひ、兄、障子をかなたこなたに射とおし、「いつかは、われら十五・十三に也、父の敵にゆきあひ、かやうに心のまゝに射とをさん」。箱王きゝて、「さることにては候へ共、大事の敵、弓にては、とおくおほえたるに、かやうに首をきらん」とて、障子の紙をひききり、たかぐとさしあげ、側なる木太刀をとりなをし二つ三つにうちきりて、すててたちたる眼ざし、人にかはりてぞ見えたりける。

であり、兄一万は竹の小弓を、弟箱王は木太刀を持つとしてゐる。しかるに、寛永頃無刊記整版では二人とも小弓に矢をつがえ障子に向かう絵になっている。この場面を、真名本の本文は、夜明、日暮、竹小弓薄作矢一取副、出侍遊、有三明障子二人立向、射三通暖方此方、兄一萬合、弟宮王、哀我等何成長、成三和殿十三、我十五、有、何野末山奥、親敵助經如

レ是差合射執、後成三左右、那殿云、和殿弓吉射習、我射習、弓矢道有、男一能、弟宮王打低槌領状、（巻第四）

とする。兄弟二人とも竹の小弓を携えているのである。やはり、寛永頃無刊記整版が真名本のごとき話を絵にしているのに対して、寛文三年刊本は、より流布本『曾我物語』の本文に忠実な絵を入れたのである。

また、卷五「三原野の御狩の事」に入れられた挿絵では、寛永頃無刊記整版は屋内で歌会が開かれている様子を描き、寛文三年刊本は雨天の屋外で馬上の頼朝に歌を詠進する様を描いている。この場面は、狩り場で雨に降られた頼朝が、梶原景季に歌を詠ませるところである。「その日の午の刻に、また空にはかにくもり、神なりて、雨やうくこぼれ、笠をうるほす」という記述からも、寛文三年刊本の挿絵に描かれた、雨天の屋外という状況の方が、本文に即しているといえる。ただし、この場面では、真名本でも屋内で歌会が催されたという記述は見られない。

四

『舞の本』「夜討ち曾我」で兄十郎が屋形巡りをする場面の挿絵に描かれた家々の幕の紋と、絵入版本『曾我物語』の同じ面に描かれた幕の紋との類似から、両者に直接交渉があったことは先覚にも指摘があるが、ここでは「十番切り」の挿絵を取りあげ、絵入版本『曾我物語』の挿絵と比較してみる。

『舞の本』「十番切り」には、以下のように都合一〇の図版が挿入されている。

〔第一図〕 敵討ちを遂げた兄弟、松明の明かりに互いの顔を見合わせる。

〔第二図〕 五郎、祐経にとどめをさす。

〔第三図〕 降りしきる雨の中、兄弟、陣中の人々を斬る。

〔第四図〕 人々、松明を持ち出す。

〔第五図〕 騒動を聞き、武装して出ようとする頼朝を、一法師丸が袖を押さえて留める。

〔第六図〕 縛についた五郎、頼朝の尋問に悪びれもせず答える。

〔第七図〕 五郎、兄の首を一目見て肩を落とす。

〔第八図〕 浜に据えられた五郎、見物の人々に浄土の三部経を説き聞かせる。

〔第九図〕 五郎の背後に、太刀取りが立つ。

〔第二〇図〕 富士の裾野に兄弟が祭られ、人が参拝する。

『舞の本』「十番切り」は、流布本『曾我物語』の巻九「祐経にとどめをさす事」「十番ぎりの事」「十郎が討死の事」「五郎めしとらるゝ事」、巻十「五郎御前へめしだされきこしめし」とはるゝ事」「犬房が事」「五郎がきらるゝ事」、巻十一「兄弟神にいはるゝ事」の本文を部分的に切り取り、記事の順序を多少入れ替

え、一部増補、改訂したものである。流布本『曾我物語』のこれらの章段には、寛永頃無刊記整版で一六図、寛文三年刊本で九図の挿絵が入っている。則ち以下の通りである。なお、寛無は寛永頃無刊記整版を、寛三は寛文三年刊本を示す。

① [寛無] 五郎、祐経にとどめをさす。

② [寛無] 兄弟、名乗りを上げる。

③ [寛無・寛三] 兄弟、人々を斬り回る。(寛三の挿絵は、前述(第二節)の通り。)

④ [寛無] 兄弟、人々を斬り回る。

⑤ [寛無] 人々が松明を持ち出す。

⑥ [寛無・寛三] 十郎、足を斬られ、自害しようとする。

⑦ [寛無] 五郎、兄の亡骸を抱く。

⑧ [寛無・寛三] 五郎、堀藤次を追う。

⑨ [寛無・寛三] 五郎、五郎丸に取り押さえられる。

⑩ [寛無・寛三] 騒動を聞き、武装して出ようとする頼朝を、一法師丸が袖を押さえて留める。

⑪ [寛無] 縛についた五郎、頼朝の尋問に悪びれもせず答える。

⑫ [寛無・寛三] 五郎、兄の首を一目見て肩を落とす。

⑬ [寛無・寛三] 犬房、五郎を打つ。

⑭ [寛無] 頼朝、五郎に安堵状を下す。

⑮ [寛無・寛三] 五郎、斬られる。

⑯ [寛無・寛三] 富士の裾野に兄弟が祭られ、人が参拝する。

「十番切り」で増補された記事というのは、捕らえられ浜に据えられた五郎が、斬首の前に、見物の人々に浄土の三部経を説き聞かせるという場面である。この場面对応する〔第八図〕が絵入版本『曾我物語』にないのは当然のこととして除外するにしても、祐経にとどめを刺す前の兄弟を描く(〔第一図〕)か、後の兄弟を描く(〔二〕)かの相違以外、「十番切り」の八つの図は、すべて寛永頃無刊記整版の挿絵と絵画化された場面や構図につ

いて——構図の面では「第一図」と②の図も——共通している。特に、捕らえられた弟五郎が頼朝の尋問に悪びれもせず答える場面を描く図（「第六図」・⑪）や、兄の首を一目見て肩を落とす五郎を描く図（「第七図」・⑫）など、酷似している。「舞の本」と寛永頃無刊記整版との先後の関係ははっきりしないが、両者に交渉があったと見てよからう。

また、五郎が斬られる⑬の図と、兄弟が神としてまつられる⑭の図は、流布本『曾我物語』本文ではそれぞれ巻十の半ばと巻十一末尾に配され、位置的に大きく隔たっている。それにもかかわらず類似した挿絵が三本ともに存在しているのである。

寛文三年刊本から加えられた挿絵にも、『舞の本』との関係が窺えるものがある。巻二冒頭の「大見・八幡をうつ事」という章段の挿絵である。寛永頃無刊記整版では、この章段の挿絵に、祐親が大見・八幡二人の首を前にして喜ぶ場面が描かれている。寛文三年刊本は、本文の記述ではそれよりも少し前に当たる、大見・八幡を討ち取る合戦の様子を挿絵にしている。ここは、合戦の場面を持たない『曾我物語』の中で、唯一、甲冑を身につけた合戦絵である。その構図は、『舞の本』「高館」¹⁶の第八・九図と左右逆の構図になっている。押し寄せる敵を櫓から矢で射る様も共通している。流布本の本文では、合戦の様を詳細に記してはいないので、この絵が本文に即した挿絵とは言いが切れない。寛文三年刊本は、先行する版に存在しなかった「合戦絵」を、『舞の本』の構図を流用して新たに挿絵として加えたのである。これは、『曾我物語』における唯一の「合戦絵」である。寛文三年刊本は、先行する版の挿絵を参照すると共に、『舞の本』

をも見ていたと考えてよい。

また、「十番切り」と記事の重なる部分の挿絵において、寛永頃無刊記整版で描かれなかった雨の線が、『舞の本』と寛文三年刊本には描かれていることから、その可能性を見出せる。と同時に、この雨の線は、第三節でとりあげた、本文の記述に忠実な挿絵ということもできる。

五

寛文三年刊本には、唐・天竺のいわゆる異国の説話に関する絵の割合が多く、その絵は、明らかに異国を思わせるものである。例えば資料E・Fの絵である。当然、絵の中には『曾我物語』に登場する人物は描かれない。絵だけを見ると、物語には全く関係がないのである。現在のところ、これらの挿絵の原図の特定までは到っていない。

いわゆる「軍記」と分類される『保元』『平治』『平家』『義経』の絵入版本には、それぞれの本文に異国の説話が在るにもかかわらず、異国の様を描く挿絵は殆ど見られない。異国の様を描く挿絵の多さは絵入版本『曾我物語』の一つの特徴と言える。

寛永頃無刊記整版と寛文三年刊本において、絵の増減とその種類について数値化したものを示すと次の通りである。

加えられた挿絵の数 二六図

物語の筋に関係する挿絵の数 一二図（46・2％）

挿話に関係する挿絵の数

異国の説話についての挿絵の数 一一図（42・3％）

日本の説話についての挿絵の数 三図 (11・5%)
削除された挿絵の数 九四図

物語の筋に係る挿絵の数 七六図 (80・9%)
挿話に係る挿絵の数

異国の説話についての挿絵の数一五図 (16・0%)
日本の説話についての挿絵の数 三図 (3・2%)

寛文三年刊本から新たに追加された挿絵の数は、二六図であり、その内、異国の説話についての挿絵が四割強の一四図にもほる。逆に削除された挿絵の数は、全部で九四図であり、その中に占める異国の説話についての挿絵の数は、二割を下回る一五図にとどまる。物語の筋に係る挿絵の数は、加えられた絵数の四割強を占めているものの、削除された絵数の八割が物語の筋に係る挿絵であり、結果的に物語に係る挿絵の数は大きく減少した。このことに比較すると、異国の説話についての挿絵は残る割合が高かったと言える。全体の絵数が減少傾向にある中で、異国の説話についての挿絵はほぼ横這いの数値で推移したのである。

『曾我物語』は、本文流伝の間に、漢籍故事等の挿話の著しい増加を見た。⁽¹⁷⁾ そのことが挿絵についても言えることは明らかであるが、寛文三年刊本では、異国の説話については先行する版の絵を残し、更に新しく絵を入れようとする姿勢が見られるのである。こうした異国の説話に関する挿絵を多く有する寛文三年刊本は、ほぼ同時期に刊行された寛文七年刊『三國物語』⁽¹⁸⁾ などの絵入説話集のような様相を呈する。

おわりに

以上、寛永頃無刊記整版と寛文三年刊本の挿絵について、比較・検討を試みてきた本稿のまとめしておく。

寛永頃無刊記整版の挿絵は、絵の入り方についての制約もあるが、本文のせまい範囲を、多くの挿絵によって物語の進行に沿うように紹介・説明していくものである。

寛文三年刊本の挿絵は、本文の内容を断片的に表現し、見開き一面という広い構図を用いて本文の叙述をより多く絵に取り込もうとするものである。また、物語の進行はもろろんのこと、異国の説話にいかにか挿絵をつけるかという点にまで注意が払われている。

『曾我物語』は、流布本に至って本文の流伝はほぼ終了した。他の多くの作品がそうであるように、版本の出現によって本文は固定した。次いで「挿絵」が入れられた。

挿絵は、視覚化された像によって、享受者の読み方がある面で固定化する、或いは縛るものである。であるならば、『曾我物語』に最初に挿絵を入れた人物は、その意図の有無に拘わらず、挿絵による改作を行ったと言える。そうして、その挿絵を差し替え、訂正し、或いは削り、或いは加えたりすることは、部分的改作であると言える。

挿絵の流伝を見てみると、『曾我物語』十二巻本としての本文が固定した後の更なる改作の方法として、敵討ちを中核に据えて多くの挿話が盛り込まれた物語とでも言える『曾我物語』の内質が、さらに色濃く出てきたという事が確認できるのである。



3ウ



3オ

資料A

寛永頃無刊記整版



資料B

寛文三年刊本



資料 D

寛文三年刊本



資料 C

寛永頃無刊記整版



資料 F

卷七・しゃうめつ婆羅門の事

寛文三年刊本



資料 E

卷四・肩間尺が事

寛文三年刊本

- 1 注 現存する真名本・妙本寺本と、仮名本系諸本の直接の関係は希薄なため、妙本寺本を真名本系諸本の一本と考え、仮名本系諸本は、真名本系別本に基づいて成立したものと考えられる。
- 2 市古夏生氏が「絵入本の時代——『絵入』の流行」(『国文学解釈と教材の研究』平成八年三月、学燈社)において、絵入本の普及した時期の問題について論じておられる。
- 3 村上学氏が『曾我物語の基礎的研究』(昭和五九年、風間書房)第一篇書誌篇第二章版本(194、287頁)において調査されている。
- 4 同じ刊記を有する別の本もそれぞれ多く残っており、同じ版でも絵の数に多少の変化がある。同じ版の中で、絵の数が多く、状態の良いものを、各版を代表させてここに記す。
- 5 旧蔵者横山重氏の識語に、
挿絵は、一頁の図版に二個又は三(四)個の刷り板を組合せてある。刊行 者は、絵板を自由に組合せて幾度も使用するつもりであったろう。
- 6 前掲書(注3)の中の氏の呼称に倣う。
とある。実際に図版には組み合わせる刷り板の隙間が白線となつて残っている。一頁で多いところでは一〇程の刷り板を組み合わせた跡がうかがえる。
- 7 前掲書(注3)
- 8 前掲書(注3)
- 9 前掲書(注3)の中での氏の呼称に倣う。
- 10 前掲書(注3)
- 11 流布本の本文は、日本古典文学大系『曾我物語』に拠る。
- 12 真名本の本文は、角川源義氏『妙本寺本曾我物語』(角川書店、昭和四四年)に拠る。
- 13 前掲書(注3)
- 14 東京大学総合図書館・霞亭文庫蔵整版『舞の本』(寛永整版)
- 15 麻原美子氏は、『舞の本』の刊行期を慶長から寛文の時期とされる(『幸若舞曲考』新典社、昭和五五年)。

- 16 前掲書(注14)
- 17 日本古典文学大系『曾我物語』解説。古くは山岸徳平氏が「仇討文学としての曾我物語」(『日本文学聯講』二期、昭和二年八月)において『宝物集』との関係を指摘されている。
- 18 国文学資料館蔵本『三國物語』寛文七年(一六六七)刊。三國の説話を、我朝・唐・天竺の順で配列し、その単位を繰り返す。全二三八話を収め、三〇の挿絵を有する。挿絵の内訳は、我朝一〇図、唐九図、天竺一一図である。『国文学研究資料館報』(第一一号、昭和五三年九月)において、徳田和夫氏が新収資料として紹介されている。
- 〈付言〉 本稿は、平成八年筑波大学国語国文学会大会において口頭発表したものを再考し、まとめたものである。発表の後、多くの貴重なご意見・ご指導を賜りましたことを深謝申し上げます。また、本稿を成すにあたり御取蔵書やマイクローコピーの閲覧を御許可下さった御所蔵機関に御礼申し上げます。

(こいど もりとし 筑波大学大学院博士課程
文芸・言語研究科 日本文学)